

横浜はじめ病院の診療の再開について

横浜はじめ病院は、この度、診療を再開しましたので、お知らせします。

診療内容は、自宅療養中の新型コロナウイルス感染症の患者さんのうち、発熱症状や呼吸苦があり療養中に体調が悪くなる恐れがあると医師が判断した方などを対象に、短期間の入院（2日～5日程度）などにより、薬物投与など重症化を防ぐための早期治療を行います。

患者さんが、徒歩や自家用車などで直接来院することはありません。また、発熱や咳などの症状がある方が、今までのように受診することはできませんので、来院することはお控えください。



【病院の概要】

運営法人	特定医療法人財団 慈啓会
病床数	確保病床数 60床
病院の位置づけ	神奈川モデル認定医療機関
対象患者	症状が無い、または発熱など症状が軽い患者さんを対象に、重症化を予防するため、点滴など薬剤投与による治療を行います。 *人工呼吸器などが必要な、重い症状の方は入院しません。
医療従事者等	24時間、医師、看護師、警備員等が常駐 *医師、看護師、薬剤師、診療放射線技師は横浜市立大学からの派遣職員など

特定医療法人財団慈啓会から地域の皆様へ

本院での新型コロナウイルス感染症の取扱いについては、横浜市・横浜市立大学の支援をいただきながら、調整を進めてきました。地域の皆様にご安心いただけるよう、感染防止対策をしっかりと講じています。

横浜はじめ病院の再開にあたっては、皆様方のご理解、ご協力をいただきながら、質の高い医療を提供できるように努めることで、地域の皆様、横浜市の皆様のお役に立てるようにしていきたいと考えています。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

特定医療法人財団 慈啓会
理事長 新納 憲司

再開にあたり、横浜市立大学の支援を受けて、改修工事などを行った横浜はじめ病院の感染防止対策の内容や患者さんの来院方法などについて、ご紹介します。

● 病院内感染防止対策

新型コロナウイルスは主に「三密」環境で感染が広がります。感染者に直接接したり、閉鎖空間で接したりしないよう感染対策を徹底しています。

感染防止対策として、病室には、医療用の陰圧装置という機械を設置しています。この装置により、病室の空気がそのまま室外に流れないようにし、HEPA フィルターというウイルスを通さない高性能フィルターを通すことで、空気を浄化しています。

なお、患者さんが入院中に滞在する区画と、医療従事者がカルテ記載などを行う区画は、パーテーションやアクリル板などで分離します。



患者さんの受付はアクリル板越しに行います。



病室には医療用の陰圧装置を設置しています。

● 患者さんの搬送について

患者さんは、すべて感染防止対策がされた車（消防局救急車、民間救急車、感染防止対策がされたタクシー等）で搬送され来院し、また自宅に戻る際も同様に搬送されます。また、患者さんの出入りの際は、警備員が通行人を誘導するなど周囲に注意を払うとともに、患者さんのプライバシー保護のため、病院入口から車停止位置の間に目隠しのためのパーテーション等を設けます。



搬送時のイメージ写真です。

● 患者さんの外出について

患者さんが外出することはありませんが、地域の皆様にご安心いただけるよう、正面玄関を施錠し、また、監視カメラや人感センサーを設置し、24 時間警備員が管理します。

● 地震や火災が起きたら

大地震が起きても、建物が倒れる恐れがないときは、患者さんは病院内にとどまります。病院内に3日分以上の食料、飲料水を備蓄しています。

火災や建物の倒壊など、病院内にとどまることができない場合は、救急車などで予め病院が定めた場所（病院を運営する慈啓会が所有する建物）に患者さんを搬送します。

横浜市内の感染状況などを参考に掲載しています。併せてご覧ください。

●新型コロナウイルス感染症の第5波における市内状況

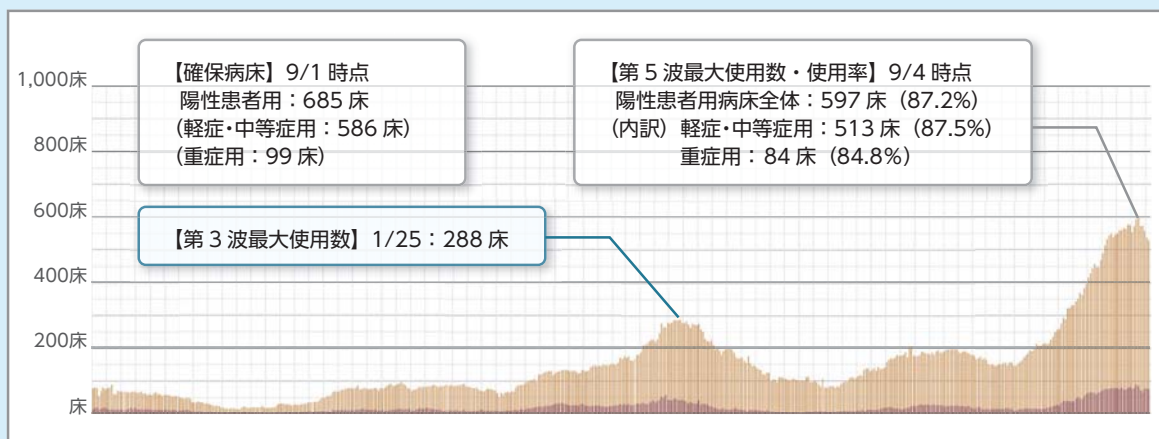
第5波における爆発的な感染拡大により市内の陽性患者受入病院の病床が中等症や重症の患者さんでひっ迫する中で、発熱や呼吸苦などの症状があり入院したいと思っても、自宅や施設で待機せざるを得ない患者さんが市内に数多くいらっしゃいました。

【参考データ】第5波における陽性患者用病床の利用状況

横浜市内では、コロナ陽性患者用の専用病床を令和3年9月1日時点で685床確保していましたが、第5波の中、令和3年9月4日の専用病床の使用率は、軽症・中等症用病床87.5%、重症用病床84.8%と、ほぼ受入可能数の上限となる状況でした。

この時期、市内の各医療機関では、自宅療養中に症状が悪化する患者数の増加が急激だったため、病床を確保することが非常に厳しい状況となり、医師が延期できると判断した整形外科や眼科などの入院・手術を一時停止することも緊急的な対応として行いました。

【グラフ】第5波における市内の陽性患者用病床の利用状況推移



●第6波に向けた陽性患者用病床の拡大

横浜市では、第5波の状況を踏まえて、冬場にかけて再流行による第6波の到来に備えるため、陽性患者用病床の拡大や自宅療養者への早期治療などを目指し、市内医療機関と協力して、専用病床の拡大を進めています。現在、専用病床数（中和抗体療法専用病床含む。）は、令和3年9月1日時点で34病院・685床だったものが、令和3年12月22日現在、40病院・879床まで拡充できています。

【図】横浜市内の病床拡大の状況（令和3年9月と令和3年12月の比較）

区分	R3.9		増△減	増△減
	病床数	病院数		
陽性患者用確保病床	685	34	28%増	
重症用	(99)			
中等症等用	(586)			
中和抗体療法専用病床	0	0		
	R3.12			
	病床数	病院数	病床数	病院数
	849	39	+164	+5
	(101)		(+2)	
	(748)		(+162)	
	30	11	+30	+11

●横浜はじめ病院が地域医療に果たす役割について

横浜市内の陽性患者用病床の拡大が進められる中で、横浜はじめ病院も、療養中に体調が悪くなる恐れがあると医師が判断した軽症及び中等症Ⅰの患者さんを対象に、「短期間の入院（2日～5日程度）などによる、薬物投与など早期治療を専門に行う病院」の役割を担います。

今後、神奈川区民の皆様をはじめ、自宅療養中の軽症患者さんを中心に、必要な場合に迅速に治療を受けることができる環境を提供していきます。

●横浜はじめ病院が、新型コロナウイルス感染症の患者さんの早期治療を専門的に行う医療機関として再開することについて

第6波への備えとして、新型コロナウイルス感染症の患者さんが、自宅などでの療養中に症状が悪化する前に、重症化を予防するための早期治療を専門的に行う医療機関の重要性が高まりました。

しかしながら、コロナ診療と通常診療とを並行して行っている市内の医療機関が、新型コロナウイルス感染症の専門病院となるためには、がんや心臓疾患などの一般的な医療を完全に休止することになりますので、実現は困難でした。

第6波の到来に備えるために、早急に新型コロナウイルス感染症の専門病院を整備する必要がある中で、横浜はじめ病院は休止中であり、感染防止対策のための改修工事を行いやすいという利点がありました。

また、医療スタッフについても、既に新型コロナウイルス感染症の患者さんの診療を多く行い、治療法や感染防止対策に精通している横浜市立大学から、医師、看護師、薬剤師、診療放射線技師など医療スタッフを横浜はじめ病院に派遣いただけることになり、医療提供体制を迅速に整えることができました。

今回、横浜はじめ病院の再開により、症状の軽い新型コロナウイルス感染症の患者さんに早期治療を行う専門の病院ができることとなります。これにより、通常医療とコロナ医療を並行して行っている市内医療機関では、感染拡大が発生したとしても、症状の軽い患者さんを入院させるために、他の患者さんの入院治療や手術などを延期せざるを得ないといった影響を小さくできることも見込まれるなど、神奈川区にお住まいの皆様をはじめ、市民の皆様に安定した医療を提供できる環境を作ります。

発行 令和4年1月 特定医療法人財団慈啓会
横浜はじめ病院
住所：神奈川区大口通 130 番地
横浜はじめ病院コールセンター
電話番号：045 (550) 5317 (受付時間：平日9時～17時)
FAX番号：045 (401) 5001

運営支援 横浜市・公立大学法人横浜市立大学